



Risk Flash No.75 (Vol.3 No.13)

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター
 発行責任者：リスク研究センター長 久保英也
 〒522-8522 滋賀県彦根市馬場1-1-1
 TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189
 e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp
 Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>

- 研究紹介：労働からみるベトナム社会・・・・・・・・・・・・・・・・・・Page 1
- 今週の論文紹介：桂泰三氏オーラルヒストリー vol.1~3・・・・・・・・・・Page 2
- 教員紹介：真鍋晶子・リスク研究センター通信・・・・・・・・・・Page 3

研究紹介

労働からみるベトナム社会

やまだかずよ
 経済学科准教授 山田和代

リスク研究センターとハノイ国民経済大学 (NEU) との共同研究の一つとして、ベトナムにおける労働力編成とジェンダー格差問題に関する研究を開始しました。

ベトナムは、リーマンショック以降やや減速したもの、この10年間、2ケタに迫る経済成長率を遂げており、海外資本の進出や製造業・サービス産業での労働力需要がさらに高まっています。

この共同調査では、経済発展の中で、「労働」をめぐるどのような問題が発生し、いかなる政策をもって対応し、解決していくのかを考察します。そのために、現在、NEU の研究者と本格的な研究に向けた体制を作りはじめています。その中では、研究課題の基礎調査を行いながら、労働問題への課題を整理し、労働やジェンダー問題を扱う政策担当者へのインタビュー調査を実施しようと考えています。

経済発展が進むベトナムについて、労働領域でのジェンダーをめぐる学術的関心として、例えば次のことがあげられます。

まず、ベトナムの労働力人口を産業別にみれば、農業などの第一次産業に従事する者が半数を占め、自営業者や家内労働者の割合が高いのが特徴的です。1986年のドイモイ（「刷新」）以降も農業政策を維持しつつ、また投資上昇基調の中で、労働市場において女性が「雇用者」としてどのような経済的地位に編成されるのかが注目されます。この場合に、

雇用機会や職種の偏向（性別職務分離）、男女間賃金格差、職業訓練や企業内職位の格差、失業リスク要因など、ジェンダー間の問題は無視できません。

また、女性の雇用進出が進み、家庭内の家事や育児などを担う「家事使用人／家庭内労働者」の役割にも着目する必要があります。その他にも、工場地区 (IZ) や輸出加工区 (EPZ) での「女性活用」の実態、性産業とトラフィッキング（人身取引）の問題、農村と都市との労働移動のあり方や地域間格差、貧困問題に対処するための社会保障制度の確立など、多くの研究課題がみられます。

他方、こうした労働をめぐる問題・課題に対し、政策面からの取組を把握する必要があります。中央官庁の一つに、日本の厚生労働省にあたる、「ベトナム労働・傷病兵・社会省」(MOLISA) がありますが、ナショナル・マシーナリーとして同省のジェンダー平等局の政策や調査は大いに注目する必要があります。加えて、ベトナム国内の NGO や国連機関の活動・連携もはずせません。

日本国内では、すでに国際協力機構 (JICA) の詳細な報告書や労働政策研究・研修機構 (JILPT) の労働情報が出されており、こうした先行研究も参照していきます。

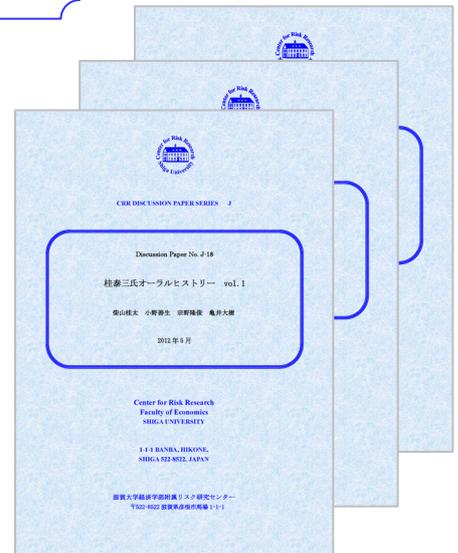
リスク研究センターと NEU に支えられたこの共同調査では、「労働とジェンダー」にこだわり、労働実態を把握しながら、ベトナムの社会形成を追っていきたいと思います。

今週の論文紹介

桂泰三氏オーラルヒストリー vol.1～3

著者：滋賀大学 社会システム学科准教授 しばやまけい た 柴山桂太
 おのよしお 関西大学 商学部准教授 小野善生
 むねの たかとし 滋賀大学 社会システム学科准教授 宗野隆俊
 かめ いたい き 滋賀大学 経済学研究科博士前期課程 亀井大樹

収録：CRR DISCUSSION PAPER No. J-18・J-21・J-22



著者のつぶやき

「桂泰三氏オーラルヒストリー」は、シャープ社副社長を長く勤められ、現在はシャープ社顧問である桂泰三氏（本学OB）への長時間インタビューの記録です。

1930年生まれの桂氏が、当時の早川電機工業に入社されたのは1955年。経済白書が「もはや戦後ではない」と宣言し、日本が高度成長へと入っていく年でした。それから1998年に引退するまでの40年間は、日本が高度成長から安定成長、バブルとその崩壊を経て「失われた10年」へと至る、戦後日本経済史そのものと言えます。桂氏へのインタビューを通じて、日本の電機産業の歴史、ひいては戦後日本経済史を一個人の視点から記録に残そう、というのが本研究のねらいでした。

桂氏との出会いは、2006年、陵水会館での昼食会で一緒したことに始まります。シャープが液晶事業への大型投資を行う時に、どんな判断があったのか。その内幕のドラマは、伺っていて、とてもスリリングでした。

その後、お会いしてお話を伺うなかで、戦後日本経済の歩みについて、さまざまなことを学ばせていただきました。戦後の焼け野原から、世界二位（最近、中国に抜かれて三位になったようですが）の経済大国へと発展していった日本経済の歴史について、最低限の

ことは本を読んで知っているつもりでした。しかし、その最前線を生きた方の体験談は、本の知識など比べものにならないほど密度の高い情報や知見に溢れています。しかも桂氏のお話は、単なる体験談では終わりません。当時の日本や世界の状況がどのようなものであったのか、そのマクロな歴史を通じて自らの体験を意味づけるという、学者顔負けの鋭い分析と考察に満ちています。

この濃密で貴重なお話を「聞き書き」（オーラルヒストリーとは、日本語で言えば「聞き書き」です）して、記録に残す必要があるのではないかと。そのような思いから、2010年から11年にかけて全9回のインタビューを行い、それを整理して発表したのが、今回のディスカッション・ペーパーになります。

今回、紹介させていただくのは、その最初の3回になります。幼少期の戦争体験から彦根高商時代を扱った第1回。シャープ入社後、高度成長期にテレビの販売や宣伝に尽力された第2回。そして経営企画室長としてニクソン・ショックやオイル・ショックをどう乗り越えたのかを扱った第3回と、いずれも他では知ることのできない、興味深い内容になっていると思います。是非、ご一読ください。（柴山桂太）

教員紹介 「真鍋晶子」

ミシガン州ペトスキーに出張してきました。ミシガンは以前滋賀大の国際交流のためよく訪れましたが、今回は学会発表という研究目的でした。先住民の名がついたミシガン湖畔のこじんまりした街に世界各国から300人も集まったのは、アーネスト・ヘミングウェイが0歳から22歳まで家族と毎夏を過ごした、その作品にとって重要な土地であるため、ヘミングウェイ協会の国際大会が開かれたからです。

私の専門は英語で書かれた文学、アイルランドとアメリカの文学で、特に詩を中心に研究しています。とりわけ、エズラ・パウンドという人生の大半をヨーロッパで過ごした米詩人の詩に惹かれています。パウンドは自ら詩を書くだけではなく、能力があると見なした文学者を世に出すために、作品の校正指導、出版手配など無私の支援をしました。その支援を受けた一人がヘミングウェイで、彼は一生感謝し続けました。（私は二人が出逢った、文化芸術の沸き立つ1920年代のパリにも興味を持ち続けています。公開中のウディ・アレンの『ミッドナイト・イン・パリ』に、この時代が面白く描かれています。ヘミングウェイも出てきます。パウンドは20年代パリの重要人物ですが、ある思想上の問題のためか、残念ながらアレンは登場させていませんが。）『老人と海』でノーベル賞を取ったように、ヘミングウェイは小説家です。ところが詩も書いており、シカゴ・カブスの野球観戦についての12歳の詩を皮切りに、56年に書いたヴァレンタインカード的なおちゃめなものまで、90編が入手可能です。彼の詩は小説に隠

れて、ほとんど扱われることがありませんでした。私は、今月の彼の誕生日に出版される7年越しの企画『ヘミングウェイ大事典』に全詩を解説しました。執筆中に彼が英語の可能性を駆使して実験を試みた優れた詩人であることに気づき、執筆が楽しくて仕方ありませんでした。脱稿後、様々なテーマが心に渦巻き、一端を彼の詩と俳句をテーマに学会発表したのです。既存研究が少ないためか聴衆が満ち、質問もたくさん受け、ますますやりがいを感じました。帰国直後、『ヘミングウェイ研究』に彼の詩と狂言についての論文が出版されました。この二論文には、私のアイデンティティに関わる日本の言葉・文化・芸能と専門分野である英語の詩世界を交錯させました。その後、彼の詩について論文、講演の依頼が次々



に来て、しばらくヘミングウェイの詩に没頭しそうです。

また、学会で自らも発表し、多くの発表に接して、英語の論文・プレゼンテーションの「形」の重要性、またこれこそ経済学部が身につけるべきと再確認しましたので、学生に指導し続けたいと思っています。

まなべあきこ
社会システム学科教授 真鍋晶子

リスク研究センター通信

陵水会兵庫支部総会に参加して

2012年6月30日(土)に神戸市の神戸外国倶楽部で兵庫支部総会が開かれました。総会には戸田一雄理事長や梅澤直樹経済学部長を含め、34名が出席されました。戸田理事長は来賓あいさつにおいて最近陵水会の会員が増えないことや若い人が陵水会に関心を持たないことを懸念されていました。記念講演では財団法人竹中道具館の赤尾建蔵館長が「大工道具とものづくりの心」という題で、「日本は素晴らしいものづくり精神と技術を持っている」と述べられました。小生も総会の場でリ

スク研究センターの活動について紹介をする機会を得ましたので、関西広域連合と韓国大慶園広域連合間の産業振興や環境研究のための協定締結を成果の一つとして紹介しました。

ピアノ演奏やビンゴゲームもあり、4時間半という長時間の総会ではありましたがあっという間に終わったような感じでした。総会運営をスムーズに行うためにご尽力いただいた兵庫支部の皆様にご心より感謝の言葉を申し上げます。

きむ びよん き
(経済学科准教授 金 秉基)

「リスクフラッシュご利用上の注意事項」

本規約は、滋賀大学経済学部附属リスク研究センター（以下、リスク研究センター）が配信する週刊情報誌「リスクフラッシュ」を購読希望される方および購読登録を行った方に適用されるものとします。

【サービスの提供】

1. 本サービスのご利用は無料ですが、ご利用に際しての通信料等は登録者のご負担となります。
2. 登録、登録の変更、配信停止はご自身で行ってください。

【サービスの変更・中止・登録削除】

1. 本サービスは、リスク研究センターの都合により登録者への通知なしに内容の変更・中止、運用の変更や中止を行うことがあります。
2. 電子メールを配信した際、メールアドレスに誤りがある、メールボックスの容量が一杯になっている、登録アドレスが認識できない等の状況にあった場合は、リスク研究センターの判断により、登録者への通知なしに登録を削除できるものとします。

【個人情報等】

1. 滋賀大学では、独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律（平成15年5月30日法律第59号）に基づき、「国立大学法人滋賀大学個人情報保護規則」を定め、滋賀大学が保有する個人情報の適正な取扱いを行うための措置を講じています。
2. 本サービスのアクセス情報などを統計的に処理して公表することがあります。

【免責事項】

1. 配信メールが回線上的問題（メールの遅延、消失）等によりお手元に届かなかった場合の再送はいたしません。
2. 登録者が当該の週刊情報誌で得た情報に基づいて被ったいかなる損害については、一切の責任を登録者が負うものとします。
3. リスク研究センターは、登録者が本注意事項に違反した場合、あるいはその恐れがあると判断した場合、登録者へ事前に通告・催告することなく、ただちに登録者の本サービスの利用を終了させることができるものとします。

【著作権】

1. 本週刊情報誌の全文を転送される場合は、許可は不要です。一部を転載・配信、或いは修正・改変してblog等への掲載を希望される方は、事前に下記へお問い合わせください。

*尚、最新の本注意事項はリスク研究センターのホームページに掲載いたしますので、随時ご確認願います。

(<http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2/3:12>)

*当リスクフラッシュをご覧頂いて、関心のある論文等ございましたら、下記事務局までメールでお問い合わせください。

発行：滋賀大学経済学部附属リスク研究センター

**編集委員：ロバート・アスピノール、大村啓喬、金秉基、久保英也、
柴田淳郎、得田雅章、宮西賢次、山田和代**

滋賀大学経済学部附属リスク研究センター事務局（Office Hours:月一金 10:00-17:00）

〒522-8522 滋賀県彦根市馬場 1-1-1 TEL:0749-27-1404 FAX:0749-27-1189

e-mail: risk@biwako.shiga-u.ac.jp

Web page: <http://www.econ.shiga-u.ac.jp/main.cgi?c=10/2>